

高校2年生の4月、学校の図書館で「大学への数学」の4月号に出会い、「これだ!!」と思い、小遣いで買い始めました。この出会いがあったから、高校数学がより楽しくなったことは間違いなくと思います。今でも、自分の人生を前進させる読書は数学の本を読むことだと思っています。

ただ、他の本を読むことで、さまざまなことを考えたのも事実です。司馬遼太郎の小説の中で「人生の中で最も難しいことは、生き方を変えないことだ」という文があり、今でも覚えています。センター過去問の現代文に、福永武彦の「忘却の河」が載っており、そこから福永作品はほぼ読みました。

色々述べさせていただきましたが、家にある小説の中で何か1作品だけ持っていくなら、坂口安吾の「白痴」の文庫本を選ぶと思います。

以下、今まで読んだ文庫本の中から選んで紹介させていただきます。斜体箇所は本文中の引用です。

「箱根の坂」 司馬遼太郎 新潮社 (918/S15/1-51)

「腐りはてたる世よ」

「これで駿河に下ることができます」

「おじ御、はかなげでござるな」

「これは日本国ではじめて出現した男だ。おそるべき者といわねばならぬ」

室町時代に伊豆から小田原、相模、三浦半島にかけての地域を手中に収めた伊勢新九郎(北条早雲)の物語。戦国時代の幕を切って下ろす人間。物語中、前半は伊勢家で馬の鞍(くら)を作って暮らしていた新九郎が、京近郊の山奥から伊勢家に戻ってきた妹である千萱に再会するところから始まります。

千萱との恋を若干におわせつつも、千萱は駿河の今川氏に見初められ、駿河に下ることになります。その後、応仁の乱が始まり、京は荒廃。今川氏の子を生んだ千萱だが、夫が戦死。幼い子供を抱え、継承問題が始まります。そこに新九郎が呼ばれます。駿河に下った新九郎は、後継者の後見として領地を得ます。

そこで革新的な統治を行います。年貢を安くし、民の暮らしの世話をしました。その方法により、農民階級の信望を得、版図を拡大していきます。

従来の守護は農民からは搾取するのみで、次第に力を失っていきます。通用しなくなった伝統にすぎり続ける者が衰退していく中、それまで誰も行わなかった事を実行したのが新九朗です。世の中を変えた人間。

権力を持つものの暴慢は悪。無能な権力者の時代が終わる様を見ているかと思うと、痛快なものがあります。

「マリモ」 山崎マキコ 新潮社

「インド五千年の歴史と日本の伝統食が会おう今… 黄金 納・豆・伝・説 ～カレー味～
国産大豆使用 *遺伝子組み替え大豆は使用しておりません」

言いかけたその時——。だいぶ遠くに潜んでいたはずの茶羽根の親分のようなゴキブリが、まるで狙ったかのように我々めがけて羽ばたいたのである。「ふせろ！衝撃波がくるッ」

文章の調子は上記のようなもので、軽い調子です。主人公のマリモは表面上はこのように振舞えるんですが、自分に自信がまったくなく、人の顔色をうかがって生きています。自分はダメな人間だということがマリモの考えること。自分に価値があるのだろうか、自分は生きていてもいいのだろうかということをよく考える。開き直ってしまえばいいんですが、開き直れずにずっとその考えにとらわれているマリモ。人によってはマリモに共感できるでしょうし、人によっては甘えに見えるでしょう。

「自分に自信がないとか、まだその時期じゃないとかって、ただの言い訳ですよ。人が生きていくって、もっと問答無用のものじゃないですか？いまを真剣に生きなくて、いつ、真剣に生きる時がくるんだろう。」

「——先生に会っても恥ずかしくない立派な大人になろうとしたのに、わたしが明日いなくなっても、誰も困らないような人間にしかできませんでした。わたしは役立たずの、取り柄のない、むしろ、いても迷惑なだけの人間でした」

「悲しみの歌」 遠藤周作 新潮社

何が忙しいんだよ。おめえらのやることは、何もしねえ俺たちにケチつけるだけじゃねえか。立小便しただの、信号守らねえだの、そんなことだけじゃねえか。

「もう1人、いますよ。むかし大学病院で米軍捕虜の生体解剖をやった医者が医院をやっていますよ。名前は勝呂というんです。憶えていませんか。」

「助けてください。二人で相談した結果です。」

親切とか善意というものを勝呂はとっくに信用してはいなかった。ひとりよがりの善意が相手を傷つけ、親切が他人の重荷になることを気づかぬような人間ほど始末の悪いものはなかった。

「人がもう一人の人間を救うことなど、できるかね。そんなことは、できません。私は人間ば救うため、医者になった男だが……この五十年でやったことは……人間ば殺すことだけだった……。」

「どういう意味って……絶対的な正義なんてこの社会にはないということさ。」

「だが他人を裁く資格などどんな人間にも本当はありやあ、せんのだ。」

陰うつな感情に酔える小説です。人間は、悲しみに酔えます。この本を読んで、そういう感情に酔っても構わないと思います。20代前半の頃は酔っていました。でも、そのうち、酔うのは自己満足と言いますか、あまりいい感情ではないなと思うようになりました。

この世の中って何だろうなと思えます。どう生きるのがよいのか。ガストンのような生き方がすばらしいのかどうかも分かりません。

「真昼の悪魔」 遠藤周作 新潮社

悪とは一体何なのか。盗みや殺人など、世間で言われている悪にはまだ同情の余地があることもあるでしょう。いやらしい悪を働いても何も感じない女医。彼女は自分の心は乾ききっていると言い、良心の呵責が心を癒してくれることを願って悪を働きますが、心は何も感じません。

また、この話の中で、1人が犠牲になることで100人の命が救われるのならば、1人を犠牲にして100人を助けるべきだという主張を女医がします。状況としては、治る見込みのない一人の老人患者を抗がん剤の試験に使用するというものです。どちらが「正しい」ということを言うのは中々難しいものがあると思います。ただ、その100人の人は、自分の命が助かるために1人の人が死んでいるという後味の悪さは残るかもしれません。その1人がどうしようもないワルだったら話は変わるかもしれませんが、分かりません。それに、1人を切り捨てて100人を助けなければならない状況もあるかもしれません。

悪って何だろうなと思えます。

「風神の門」 司馬遼太郎 新潮社 (918/S15/1-2)

舞台は関が原の戦い終了後から大阪夏の陣で豊臣家が滅びるまでの期間。大阪と京都を舞台に服部才蔵を中心に描かれます。読みどころは物語ではなく才蔵の生き様だと思いました。他人に頼らず自分本位に生きる。誰かに仕えるわけではなく、自分の技を売って生きる。仕事に対しては厳格。それが伊賀者の生き方。甲賀者は集団で仕事をし、主従関係というものが存在する。

隠岐殿・青子・お国・そしてもう一人。隠岐殿は大坂の豊臣家の大奥淀殿の周りの女。お国は淀殿の侍女で東国の間者。もう一人は才蔵と猿飛佐助が駿河の国に家康を討ちに行く道中の屋敷で拾った女で甲賀者。才蔵は女が不憫に思われれば女の為に苦労を惜しまない。しかし、女が才蔵に懸想しても才蔵が女に思いを寄せることはあまりない。女に心を奪われれば身の破滅が待っている。

それにしても才蔵はカッコいいです。しかし、真田幸村には一目置いています。幸村は大坂冬の陣・夏の陣ともに軍師として戦いました。しかし、冬の陣の後、三の丸の堀ばかりか二の丸の堀まで徳川側に埋められ、裸城となった大坂城に勝ち目は無く、幸村も戦死。才蔵は隠岐殿を救い、大坂城から脱出します。大坂方が敗北したのは上の腐敗ぶりからしてみても当然のことで、大坂側が勝利したとしても待っているのはろくでもない政治。滅ぶべくして滅んだと言えるかもしれません。

それにしても、誰からも束縛されることなく生きている才蔵の生き様は小気味よいです。